



総題 「ローマの信徒への手紙」における贖い

SDA聴覚しょうがい者友の会教材部

第 1 課 パウロとローマ 山地 宏 2010, 6, 26～2010, 7, 3

1. はじめに 6月26日（土曜日）

今期は「ローマの信徒への手紙」を中心に聖書の御言葉を学ぶことになっています。副読本の方でもすすめられていますけれども、出来れば、最初に、「ローマの信徒への手紙」を最初から最後まで、つまり、1章1節から16章27節まで、ざーっとまずお読みになられるといいと思います。というのは「ローマの信徒への手紙」が書かれた時代は、今のように印刷機もコピー機もなかったもので、このような手紙が教会に届いたら、みんながいる安息日の礼拝のような場所で、1人の人が大きな声で手紙を読んで、みんなに聞かせていたようです。そのような形で手紙を読んだので、聞いた人たちは、いくつかの、^{かぎ}鍵になるテーマと、全体を通して言おうとしているメッセージが心に残っただろうと思われるからです。ですから一度全体を読んだうえで、細かい部分を学んでいくと、さらに深く「ローマの信徒への手紙」を学べるだろうと思います。

さて、今週のテーマは「ローマの信徒への手紙」の書かれた歴史的^{はいけい}背景を知ることで、パウロはいつ、どのような時に、何のためにこの手紙を書いたのか、というようなことを探^{さぐ}っていきます。

2. 年代と場所 6月27日（日曜日）

聖書研究ガイドの5ページの^{ぜんはん}前半に細かい説明が書かれていますが、最初にちょっと整理してみましようね。まず、「ローマの信徒への手紙」を書いた人は、使徒パウロです。「ローマの信徒への手紙」が書かれた時期は、紀元58年の初め頃、つまりパウロの第3次^{せんきょう}宣教旅行の終わり頃だったと考えられます。また、「ローマの信徒への手紙」が書かれた場所はケンクレアイという港町であったと思われます。「ローマの信徒への手紙」が書かれた理由はいくつかあると思われますが、大きな理由として考えられるのは、^{かつれい}割礼を^{ほどこ}施すことや、モーセの^{りっぽう}律法をきびしく守るよう^{いつわ}にという偽りの教師たちの教えから、ローマの信徒たちを守るためだった、と考えられます。

3. 個人的な^{せつしよく}接触 6月28日（月曜日）

パウロが、訪問したこともないローマの信徒たちに手紙を書いたもう一つの理由は、パウロの宣教計画を^{りかい}理解してもらい、ローマの信徒たちに協力してほしいという思いを伝えることでした。この手紙を書いたあと、パウロは、エルサレムに行って、マケドニア州とアカイア州の人たちからの援助金を渡そうと計画していました。パウロはクリスチャンになったことで、ユダヤ教の指導者たちから命をねらわれていたので、エルサレムに行くことはパウロにとってとても危険なことでした。ですから、パウロの命が守られるように、そして、エルサレムのユダヤ人クリスチャンが^{いほうじん}異邦人クリスチャンからの援助金を受け入れてくれるように祈りによって支えてほしいと、ローマの信徒にお願いしたかったわけです。来週詳^{くわ}しく学ぶことになるとは思いますが、当時、ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンの間には、^{びみょう}微妙な関係があったようです。ローマは当

時の世界の中心地でしたので、ローマに住んでいる信徒の中には、エルサレムに住んでいるユダヤ人クリスチャンに仲のよい知り合いがいる人もいたかも知れません。そのような人から、前もってパウロのこの計画を伝えてもらうことで、援助金の受け入れがよりスムーズに行くかも知れません。その後で、パウロは、スペイン（イスパニア）にまだ福音が伝えられていないので、スペインに宣教に行くことを計画していました。エルサレムからスペインに行く途中にローマによって、エルサレムでのユダヤ人クリスチャンの感謝を伝えることで、当時、ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンとの間にあった、わだかまりのようなものを取り除きたいとパウロは考えていたのかも知れません。

4. パウロ、ローマに到着する 6月29日（火曜日）

「ローマの信徒への手紙」の中でパウロが書いていたのとは違う形で、^{じっさい}実際には、パウロはローマに行くことになりました。パウロが心配していたとおり、エルサレムでパウロはユダヤ人たちによって捕ま^{つか}えられてしまいます。そして何度か裁判にかけられます。結局ユダヤ人たちはパウロを有罪にする証^{しょうこ}拠を出すことが出来なかったために、パウロは無罪^{しやくほう}で釈放されるかと思われました。しかし、ユダヤ人たちが納^な得^{とく}しなかったため、パウロはローマ皇帝に上訴^{じょうそ}するしかなくなりました。そのようにして、パウロは囚人^{しゅうじん}としてローマに送られることになったのです。使徒言行録の20章から28章を見ると、パウロがエルサレムからローマに送られるまでの話しが詳しく書かれていますので読んでみて下さい。

5. 「聖なる者」となる 6月30日（水曜日）

パウロがローマの信徒たちのことをどのように考えていたのが、「ローマの信徒への手紙」の最初のパウロの挨拶を見るとわかります。パウロは、「神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ」と挨拶しています。パウロはローマの信徒たちのことを「神に愛され」ている人たちだと言いました。もちろん^{すべ}全ての人が神様から愛されています。ローマの信徒たちだけではありません。しかし、神様の愛に^{こた}応えてクリスチャンになったローマの信徒たちは、特別に神様から愛されている存在^{そんざい}だとパウロは強^{きょう}調^{ちよう}しています。また「聖なる者となった」と言っています。全ての人が神様の救いに招かれています、その招きに応じて、イエス様との特別な関係に入ったローマの信徒たちをパウロは「聖なる者」と言っているのです。ローマの信徒たちは、神様からの一方的^{いっぽうてき}なお恵みがまずあって、それを受け取ることによってその愛に応えた人、つまり私たちと同じクリスチャンですね。

6. 世界的評判 7月1日（木曜日）

ローマの教会がどのようにして出来たのか、はっきりしたことは聖書には書かれていません。いずれにしても、紀元49年頃までにローマにクリスチャンがいたことはわかっています。当時ローマは日本で言えば東京のように、当時の世界の中心地でした。そのローマにクリスチャンがいてイエス様を証^かしていたというのはすばらしいことです。なぜなら、ローマから世界中に福音が発信される可能性^{かのうせい}があったからです。「あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられている」と私たちの教会も言われるほどに、イエス様を証していきたいと思えます。